雪切恋歌

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪切恋歌

【Ｎコード】
Ｎ３３３９Ｒ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
雪女の歌によって、山に入り行方不明になる人々。
寺に拾われた孤児の助六は、依頼を受けてその村へ向かう。
そこで彼は一生忘れられない出会いをする。

※サイト、ｄノベ転載
※一部（番外編）には同性愛の表現がございます。

雪切恋歌【1】

その村では、雪女の歌を聞いたものは山に連れていかれると言われていた。
ふと思い立ったように、夜中に歌が聞こえてくる。
その美しい歌声にたちまち心は捕われ、その者は操られるように雪山に去っていくのだそうだ。
だからその村の人々は、夜は戸をしっかりと閉めきったことを執拗に確認する。
誰も雪女に連れていかれぬよう。　特に、若い男や子供がいる家は。
村人はその雪女をある名前で呼ぶ。

――結ゆい、と。

その村に、一人の男が訪れた。　名は助六すけろくといった。
姓はない。寺に捨ておかれていたのを拾って育ててもらったからだ。
雪女に悩まされる人々の噂は、助六のいる寺にも届いていた。
そこで寺の和尚に、助六は様子を見てくるよう頼まれたのだ。
助六には、見えないものを見る力もあり、そのせいもあるのだろう。
それから、雪深い寒さ厳しいこの土地に来るのもなかなか大変である。
その能力のために、若いがそれなりに場数を踏んだ者が寄越されるのも、なるほど道理と言える。
助六は、さっそく話を聞こうと、まずは村長の家を訪れた。

というより、家の中で温まりたいというのが本音なのだが。
髪は剃ってはいないが、僧の格好をしている助六ではあったが、話をそれなりに通していたため、すんなりと中に入れてもらえた。
そして村長から、雪女――結の話を詳しく聞いた。

「いつからかは知らんが、少なくとも俺の爺さんの時にはいた。歌いだす夜に何の規則性も見当たらない。そして、その歌声を聞いてしまったものは、誰彼かまわず雪山に連れていってしまうんだ。正確には、聞いた者が自分から山に向かうんだがな。だが雪女の仕業に違いあるまい」

助六は、その晩は村長の家に泊めてもらい、夜を明かした。
そして次の日の朝、助六は村の裏にある山に向かっていた。
雪女がいるというその山に。

山の上へと登っていけばいくほど、天候は悪化していった。
雪も風も激しく助六を打った。　白く視界が閉ざされていく。
雪もより深くなっていき、前へ進むのが難しくなっていった。
さらに、防寒具をつけていても、容赦なく体温を奪われ、そのせいで足も動かしづらい。
そろそろ引き際かと考えたその時だった。

音が消えた。

相変わらず周りは白かったが、閉ざされた圧迫感も消えた。
助六は何事かと、辺りを見回す。
すると、今までいなかったはずなのに、目の前に急に全身真っ白な女が現われた。

髪も白い、肌も白い、着物も白い、帯も白い、その瞳も、やや冷たく青みを帯びているが、白かった。
白く、濁っているのか。　助六はその目に違和感を覚えた。

「お前は何者だ」
誰何の声が助六の耳に届いた。
目の前の女の口が動いたから、恐らく女の声だろう。
というのも、その声が山全体から聞こえてくるようで、どこから聞こえたのかつかめないのだ。

「……俺の名は助六という。お前は……結、か」
こんな雪山で女が一人など、雪女以外に考えられない。
女はにやりと口を歪め、助六に近づいてきた。

「そう、私は結。私を知っていて、なぜお前はこの山に来たの」
女――結はそう言うと、うかべていた笑みを消し、助六の頬に手をそえた。

「！」

助六は思わず身を退いた。
なぜなら、彼女の手に触れられた場所から不審な音がし、その頬にしびれるような痛みがはしったからだ。
助六が触れてみると、冷たかった。
そして、触った自らの手に水がついた。

凍っていたのだ。

助六の驚いた顔を見て、結は小さく声を出して笑う。
その声も、小さな氷の粒がぶつかり合うような音に聞こえた。

助六は驚いてばかりはいられないと、なんとか我に返る。
「ならば俺も聞く。村の者が歌の聞こえる晩に姿を消す。それはお前のしたことか。俺はそれを調べに来た」
結はその言葉を受けて、急に顔を曇らす。
「知りたければ自分で探しなさい」
そう言うと、結は一瞬にして、何もなかったかのように消えた。
「……俺は答えたのに」
助六はしばしその場に呆然と立っていた。

雪切恋歌【2】

助六はまた山を登っていた。
天候は相変わらず悪かったが、あぁ言われてしまっては、そのまま帰るのはなんだか悔しい。
何かを見つけて帰りたい。
調べろと言ったのだから、調べてやろうじゃないか、という気にもなる。
雪をかいて進むたび、足がしびれていくが、助六は気にせず進んだ。
手足に力を入れづらくなっているため、なるべくなだらかな所を選ぶように登る。

――だいぶ登ったな。
助六はふと立ち止まり、辺りを見回した。
助六は、吹雪が少し弱まったような気がしていた。
雪はまだ細かく降っているが、肌を突き刺していた風が少し弱まったように感じる。
だから、周りの様子を少し見れるようになっていた。

――……あれ……。

助六は前方の右側に妙な風の流れを見つけた。
雪の塊しか見えないが、雪が流れているのとは違う動きをする場所がある。
何かと思って近寄ってみると、人一人が入れるぐらいの洞穴があった。

中は真っ暗で様子を探ることはできず、入るのがためらわれるが、助六は意を決して穴の中へ進んだ。
入った時、何か外と違う匂いを感じたが、気にしないことにした。
風は穴の入り口で踊るだけで、中にはそれほど強く入り込まなかった。
真っ暗な中では何も見ることができない。
助六は明かりをつけた。
温かな火は、自分の中のぬくもりをまた改めて感じさせてくれる。
と思ったのも束の間。

「！！」

明かりをつけて目に飛び込んできた中の様子に、助六は息を飲んだ。
助六の周りには、たくさんの人が重なるように倒れていた。
そのどれも、青白い顔して、目を閉じている者もいれば、宙に虚ろな目を向けている者もいた。
しかし、温かな息をしているような気配は全く感じられなかった。
よく見なくても、生きていないことはなんとなくわかった。
入る時に嫌な予感はしていたが、的中してはほしくなかった。
もしかしたら、この中に行方不明になった人達がいるかもしれない。
しかし、助六が見たところでその確認はできない。
遺体の確認は早い方がいいだろう。
それに、退く良いきっかけにもなった。
助六は、我慢してきたが、一度落ち着くと手足の冷えがひどく辛い。
凍傷だけは御免こうむりたいところであった。
助六は、一度山を下りることにした。
そうして村に着いた時には、少しふらついてしまうぐらい助六は

疲れ切っていた。
山を登っている時は全く感じていなかったが、やはり疲れがたまっていたのであろう。
そうして村長の家になんとか着いた助六は、荒い息の中、なんとか洞窟のことを伝えると、緊張が切れたのか倒れこんでしまった。

助六が気づいた時、彼はちゃんと布団をかぶって寝かされていた。
傍らにいた村長は、助六の話を村の皆に伝えたら、すぐに代表して村人数名が山に向かったと話してくれた。
村長自身は、村を守る者として、また助六の様子も見るために残ったという。

「……それから、聞いてもらいたいことがあるんだ……」

村長は、神妙な面持ちでそう切り出した。
助六も、じっと耳を傾ける。
「……実は結は、この村の者だった……」

村長のひいひいひいひいじいさんの頃の話、結はこの村でごく普通に暮らしていた。
ただ違うのは、彼女には両親がいなかったということだけ。
村の者と縁があったらしく、両親が死に、親戚の間をたらい回しにされ、行き着いたのだ。
もちろん生活は豊かでなかったが、器量も良く、美人であった結は、この辺りの地主の息子に見初められた。
少し人見知りをするのか、あまりお喋りをする方ではなかったが、

彼女には悪いところは見当たらない。
なぜ親戚の間をたらい回しにされたのか。その理由は彼女の声にあった。
彼女の声は不思議なもので、街にできた作物を売りに行った時に、客寄せのために調子をつけて宣伝をすると、客が引き寄せられる。
最初は皆ありがたがっていたが、次第に気味悪がられ、災いを呼ぶ声と言われるようになった。
そして、それに引き寄せられたのが別な意味の客だった。
彼女はその地主の息子に囲われることになった。
村人にとってもありがたいことだった。
災いを呼ぶ娘が去るのだから。

雪切恋歌【3】

初めはうまくいっていた。
地主の息子も毎晩結の歌声を望み、客人をもてなすのに結が出されることもあった。
だが、人の世とは常に揺れ動くもの。それも永遠には続かなかった。
囲い女は飽きられれば終わり。
地主の息子も、だんだんと似たような歌ばかり歌う結に飽きてきてしまった。
その歌声に魅力を感じなくなってしまっていた。
もう、感覚が麻痺してしまっていたのかもしれない。
とにかく、地主の息子は結の元に来なくなった。
声さえかけなくなってしまった。
そうなると、結は周りの者に煙たがられるようになった。
穀潰し、などと陰口も囁かれ、だんだんそれはおおっぴらに言われるようになり、皆が結を嘲るようになった。

結は絶望した。

みんなが優しくて幸せだった日々から、一気に冷たい水の中に落とされた気分だった。
深く深く、どこまでも底がない暗闇に落ちるような。

結は家を出た。白い雪で埋め尽くされた世界へ出た。
どこに行くあてもなかったが、自然と足は故郷へと向かっていた。
だが、故郷に帰ったところで、誰も結を迎えてくれるものはいな

い。
結は、辛いことがあるといつも行っていた村の裏にある山へ歩いていた。
着の身着のままで出てきたので、足は擦り切れ、着物もぼろぼろ。
寒さで肌の色も青ざめていた。
だが、結は気にすることなく歩みを進めていた。
結にとって、もう自分の体のことなど、全てに見放された人間にとってはどうでもよいこと。
彼女はなぜか、ただ山に向かっていた。

ひたすらに山を登り、しばらく登ったところ、ちょうど山の中腹辺りで結は立ち止まった。
立ち止まって、ひざまずき、寝そべる。
その動作はゆっくりと、山を撫でるように。
そうして彼女は目を閉じる。

次に目を開けた時には、彼女は人ではないものになっていた。
着ていた着物は、いつのまにか綻びがきれいになっていた。
肩が流れる髪に気づき、つまむ。
色素が全部抜かれたような白になっていた。
肌の色も、不気味なほど、まるで体の中が見えそうなほど透けて白かった。
だが、見えそうな血管も見えず、ただ薄い色の腕が見えるだけだった。
結は、それで自分が何か異質なものに変わったのだと悟った。
触れば感じられた暖かさが今はない。

頬に触れても、地面の雪と同じくらい冷たい。

「ここにいろと……言ってくれるの……」

結は、山が自分を迎え入れてくれているように感じた。
だから、結はこの山でこれからを過ごすことを決めた。

――私は山、山は私。私は山の中にいる。

結は山のために歌った。自分には歌うことしかできないから。
すると、その歌声に誘われて、旅人が近づいてきたりした。
虚ろな目で近づいてきて、結が驚いて歌をやめると、旅人は意識を戻し、結の姿を見て驚いて逃げていく。
そうして、結はいつしか「雪女」と言われるようになっていた。
「雪女」というものがどういうものか、結はよくわからなかったが、皆が恐れ慄く様はおもしろかった。
そうして何回か歌を歌うと、次々と人が来た。
今まで結を蔑んでいた者達が許しを請う姿を見て、実に滑稽で、結はおかしさをこらえきれなかった。
そして、人の温もりを奪うことを覚えた。
歌声で縛り、触れると人は簡単にその温もりを無くした。
そして、結と同じようなり、倒れた。
だが違うのは、彼らには血管が見えたことだった。
結はそれを見るたびに、自分の首筋に手を添える。

――何も、何も聞こえない。　何も、何も感じない。

雪切恋歌【4】

村長の話と結の声がかぶるように助六には聞こえていた。
助六は、そこにないものを見て、聞いて、感じることができる。
いや、正確には、そこに昔あったが今はないものを。
人々には見えていないが、確かにそこにあるものを。
結のいる山が近いこの場所に、山にある結の思念が助六に流れてきたのか。
助六は、ふと嫌な予感がした。
遺体の確認をしに、村人が山に登っていった。　一応結を警戒して、それなりの人数をそろえて。
結は、どう思うだろうか。どうしようとするだろうか。
助六は入っていた布団から抜け出し、慌てて身支度を整えた。
「村長、俺山に行ってくるから！」
「大丈夫か。お前は……」
「とにかく行ってくる！」
笠をかぶりながら、助六はそう言い、村長の家を飛び出した。

助六が再び山に登ろうとすると、また強い風が雪を舞い上げ、助六に激しくぶつかってきた。
遺体を見つけたあの洞穴の所までやってきた。
助六は、嫌な予感がどんどん膨らみ、胸が破れそうだった。
洞穴に近づいた時、覚えのある気配に立ち止まった。
全てのものを拒否する空虚な圧力、そして無音。
「結――――――――っ！！」

助六は思わず声をあげていた。
怒りにも、嘆きにも似た複雑な気持ちを含んで。
この気配は彼女の気配だ。
嫌な予感は、確定にも近い思いに変わり始めていた。
そして洞穴の中に入り、辺りを見回す。
洞窟の入り口付近には、先ほどと変わらず遺体があった。
だが、村人が遺体確認のために山に来ているはずだ。
遺体がここにあるのはおかしい。
自分がここに着く前に、彼らがここに着いているはずだ。
助六は洞穴の奥に続く、真っ暗な道を見つめた。
この先に、もしかしたら答えがあるかもしれない。
正直、いくら場数を踏んでいても、直接対峙しなければいけなくなる瞬間は緊張する。
下手をすれば自分の命が危険にさらされるからだ。
だが、助六は寺で世話になっている、師匠でもある老僧の言葉を思い出す。
人には見えないものが見える力のせいで、周りの者から奇異の目で見られていた助六を、その老僧は優しく見守ってくれていた。
――お前がそういう能力を持っているのは、神様仏様が課したお前への仕事なんだよ。お前はその能力で人々のために、この世の中のために、お前はそれを使って奉仕しろ、ということだろう。何が与えられているのかわからないよりわかりやすくて、私はうらやましいよ。それだけに、お前は大きな責任も負っているのだ。ゆめゆめ、軽挙を起こすことのないようにな。
僧侶のくせに、色々な神様を信じていた変な人だった。
建前では仏にまつわる説教なぞするが、その裏では自分なりの宗

教観を持っていた。
助六は、仏様の話より、その老僧がしてくれる話の方が好きだった。
仏様の話が嫌いなわけではないが、老僧の話の方がわかりやすかっただけだ。
でも、たぶんそれは誰にも受け入れてもらえない。
だから、助六と老僧だけしか知らない話。
その老僧の言葉を思い出し、助六は改めて意を決して、洞穴の奥へと進んでいった。

雪切恋歌【5】

しばらく暗い道を進み、外の吹雪の音も聞こえなくなってきた。
洞穴の中のはずなのに、どんどん熱が奪われていくようだ。
手足の感覚、果ては頭さえ朦朧としてくる。
助六を前に進ませているのは、もはや気力だけだった。
と、急に開けた場所に出た。
そこだけ、青く光る壁に囲まれていた。
いや、よく見ると岩に氷が貼り付いて、青く反射していた。
こんな洞穴の奥なのに、なぜ光るのだろうか。
そして、青白く光るからこそ、見えなかったものが見えてしまった。
数名の、反射する光と同じような顔色の人達が倒れていた。
恐らく、状態としては入り口にいた者達と変わらないだろう。
違うのは、まだその状態になったのが新しいということだけか。
やはり、こういうことになったか、と助六は少し顔を歪めた。
助六がその状態をしばらく眺めていると、上から声が降ってきた。

「お前もわざわざこうなりに来たの？」
そして氷の粒がくだけるような小さな笑い声が聞こえる。
助六は驚いて、反射的に上を向いた。
そこには、予想通りの姿があった。
宙を漂う、全てが透けるように青白い結の姿があった。
彼女は楽しそうに笑っていた。
一度開き直った助六も、口の端を吊り上げて笑みを作った。

「いや、俺はお前と話をしに来たんだ」
結は忌々しげに顔を歪めた。
「私はお前なんかと話すことはない。その減らず口、凍らせてしま

うよ」
結はふわりと助六の前に高度を下げて、口に手をかざそうとする。
助六はその手を強く掴んだ。
「！」
結は驚いて目を見張る。その場から動けなくなる。
「俺としては、このまま死ぬってのは困るんだよな。少しぐらい、話はできないもんかな」
助六は変わらず笑みを浮かべたまま結を見る。
その手はだんだんと凍り始め、大きく震えだす。
「は、離せ！！」
結は恐怖の色を顔に浮かべ、大きく手を振って、助六の手を振りほどいた。
助六ははじかれた手を、もう片方の手で掴んだ。
でないと、そのまま手がどこかへ行ってしまいそうだったからだ。
だが、目線は結からそらさない。
「何も怖がることはない。ただ、少しだけ俺と話をしよう。こんな所に一人でいて、色々鬱憤とかたまってるんじゃないのか？」
相変わらず薄ら笑いを浮かべている助六を、結は目をきつくして睨んだ。
「私は山とずっといた。山が全てを受け入れてくれた。お前は私と山の間に入って、私と山のことを知ろうとする。気に入らない。お前が気に入らない。私は人を捨てることで山と共にいるのに、お前はなぜ人として山と触れ合えるのか。お前などに何がわかるの。全てに受け入れられてきたお前に、全てに拒否された私のことがわかってたまるか！」

「お前はわかってほしいんじゃないのか？」
結の怒りと悲しみで大きさを増す声を、助六の冷めた、だがどこか包み込むような温かさを持った声音が制する。
結は言葉を紡げなくなった。そして、助六から目をそらせなくなった。
助六は、少し笑みを和らげる。
「言葉が話せるなら、お互いにわかり合うために話し合おうじゃないか」
「一体、何を話そうと言うの」
結は興味深そうに助六を問う。
助六はその場に腰を下ろし、結を見上げた。
「何でもいい。何か、人に聞いてもらいたいこととかないのか」
結は一瞬考えるように眉を寄せた。
だがすぐに表情を戻す。
「お前のことを聞かせて。お前は一体何なの」
助六は、意外な答えを聞いたように、少し目を見開いた。
だが、また淡く笑顔を浮かべる。
「俺か。何だと聞かれて、こうだと答えることはできないな。生憎、俺はあんまり難しいことを考えれないんだ。お前は俺の何を見てそう聞く」
まるで謎かけをしているみたいだ、と互いに思っていた。
いつのまにか結も、助六と向かい合うように地べたに座り込んでいた。

雪切恋歌【6】

「お前は山と話ができる。どうしてなの」
「別に話ができるわけじゃない。山はいつも何かを出してる。山にはそこにいる動物や植物もいるから、その全てから出ているものがあるんだ。人間はそれを感じ取るのが苦手なだけだ。お前も、そういう姿になって、人間の時わからなかったものがわかるようになっただろう」
「私は人を捨てたからわかるようになった。なぜ人間のお前がそれをできるの」
「さぁ、生まれつきこうだった。もしかしたら、俺は人間じゃないのかもしれない。こういう格好で生きて動いてるものが人間だなんて、誰が決められる？」
結は助六の言葉の端に何かを感じ取ったのか、目の色を変えた。
助六もそれに気づき、結から視線をそらさない。
これはもう謎かけではなく、駆け引きになっていた。

「私はお前を人間だと思っている。少なくとも、お前からは人間の匂いがする。他のどの動物とも違う、生臭くて、汗臭くて、泥臭い匂い」
「何だ、俺はそんなに臭いのか」
助六は顔を歪めて笑った。だが、目の色はそのままだった。
「そういう言い方をすると語弊があるけど、不思議と落ち着く匂いなのよ」
結は懐かしむように、目を細めて、視線を下げた。
少しの間の後、助六の声がした。
「人間の匂いは懐かしいか」

結はハっとして目線をあげる。　彼の声が先ほどより近くに聞こえたからだ。
すると、結の目の前には助六がいた。
結は固まった。懐かしさにも似た、切ない気持ちが急に湧き上がってきた。

「……あぁ、とても懐かしいよ……」
結は耐え切れなくなって、自分の膝に視線を落とした。
涙などとうに乾いたはずなのに、目が熱くなる感覚を覚えた。
たぶん、駆け引きは自分の負けだと結は思っていた。
この男の声は、凍っていた自分の心を温かくさせた。
最初に会った時から、何か気になる存在だった。
今思うと、それはこの男にどこか自分と似た空気を感じていたのかもしれないと思えた。

「お前は、山と話して私のことを知っているのに、私はお前のことを何も知らない」
今までとは違う、悲しげな声音に、助六は少し戸惑った。
「お前は何が言いたいんだ」
助六は、結の頬に手を添えて、自分の方に顔を向かせた。
顔が見えないと、何を考えているのか読めない。
男ばかりの環境で育った助六には、女心というものがいまいちわからなかった。
人外の者と話す時、意思疎通が図れなくなることは危険極まりない。
そういうことから咄嗟に出たものだった。
だが、結に触れた途端、助六の爪先から音をたてて凍り始める。
「！」

結は慌ててその手を叩いてはがした。

「お前は馬鹿か！　私に触れば己が凍りつくと知っているのに、なぜそうやって私に触れるんだ！！」

助六は手を振って、手についた氷を落とした。

表面にしかついていなかったので、さほどのダメージはなかった。

「触れないと、何も始まらないだろう。少なくとも、俺は触らないとわからないんだ」

何でもないことのように助六は言った。

結はその言葉に一瞬のどが詰まる。

自分は触れることが恐ろしかった。

誰かを傷つけるのではないか、誰かから傷つけられるのではないかと、いつも怯えていた。

だから、誰ともわかりあえず、誰にも受け入れてもらえなかったのだろうか。

結は、その目は宙を見たまま、止まってしまった。

だが、やがて、ゆっくりと助六の方を見る。

「……私は触れなかったから、誰の側にもいることができなかったのかな……」

その顔には、自嘲的にも見える笑みが浮かんでいた。

助六は、その顔が痛々しくて思わず奥歯を噛みしめた。

咄嗟に腕が伸びて、結の体を抱きしめていた。

「……俺が、側にいるから……」

雪切恋歌【7】

助六もどこか結に自分を重ねていた。
嫌われることを恐れて、皆の顔色を伺ってこびへつらってきた自分。
境遇は違えど、人の温もりを求めていたことは変わりない。
自分は受け入れてくれる人がいたから、今まで生きてこれた。
自分にもしそういう人がいてくれなかったら、自分ももしかしたら人でないものとしてこの世を彷徨っていたかもしれない。
助六は一層きつく結を抱きしめた。

「……は、離せ！　そんなことをしたら……！」
結は突然のことで一瞬動けずにいたが、我に返り、助六を引き剥がそうとする。
その間にも、結に触れている助六の体は音をたてて凍りついていく。
今度は助六は簡単に離れなかった。
結は仕方がないと、局部的に強い風を起こして助六を壁にたたきつけた。
助六は少しうめき、それでも顔を上げて結を見た。
だが、体力の消耗が激しかったのか、その場から動くことができなかった。
どちらも白い息をあげていた。
外気は刺さるように冷たいのに、不思議と助六は寒さを感じなかった。
もう感覚も麻痺しているのかもしれない。
だが、まだ眠くはない。大丈夫だ。
助六は自分にそう言い聞かせた。

結は恐怖と驚きと悲しみと切なさ、様々な思いが入り混じった顔をしていた。
求めていたものは目の前にある。
今拒否をしなければ、自分は寂しく山に溶け込むことはない。
山の一部でしかない自分は、いつか自我さえも山に溶け込み、完全に山の一部となるだろう。
誰かが一緒に自分といてくれるなら、何も思い残すことなく山と一緒になれる。
だが、結の何かがそれを拒んだ。

「……お前の願いは何だ」

助六の小さい苦しげな言葉に、結はそらしていた視線を助六に移す。
「お前と一緒に俺が眠ると答えても、満足してくれないのか。お前は何が欲しい。何を欲するんだ。お前がそのままだから、山は冬を迎えているのにいつまでも眠りにつけないんだ。だから俺に声が聞こえてくるんだ」
山は冬に眠る。全ての生物が冬に眠る。
だが結がいるから、山は眠れない。
結がいつまでも生き物から力を吸い取るから、山もそれを吸い取って覚醒し続ける。
山は、いつだって結の側にいた。
村の人に煙たがれた幼少の頃も、地主の息子の家から逃げ帰ってきた時も。
山だけが結を迎え入れてくれた。
なのに、自分はその山に何もできていなかった。
ただただ山に負担をかけていただけだった。
助六の言葉が結の心に深く深く、重石のように沈んでいく。　一つ、二つ、三つ……ゆっくりと確実に沈み込む。

沈み込むと同時に、彼女の目から乾いた音をたてて、何かが落ちた。
からり、からり、彼女の目から氷の粒がこぼれていた。
「……私は……私は……」
結はうわ言のように繰り返す。　彼女の膝には氷の粒がたまっていく。
助六はただ黙ってそれを見ていた。
本当は近づきたかったが、近づいて刺激したくなかったし、なによりやはり自分の体力に限界がきていた。
そうしていると、だんだんと氷の落ちる音がやんでくる。
そして、一つも音がしなくなった。
「……私の望んでいたものがわかったよ」
結は立ち上がって、自分の足で助六に近づいてきた。
彼女が地を踏む度に、氷のはじける涼しい音がした。
その音は、鈴の音にも似ている、優雅で繊細な響きだった。
そして、助六の目の前にきて、しゃがみこんで、彼と目線を合わせた。

雪切恋歌【8】

「だけどその前に、一つだけ私のわがままを聞いておくれ」
結がぎこちなく笑顔を作った。初めて見る、彼女のちゃんとした笑顔だった。
助六も結を見つめたまま、笑顔を浮かべる。
「あぁ、何だ」
結は助六の口元に手を添える。肌に触れない際で止めて。
そして、彼に口づけた。
それは長く続いたように助六は感じていたが、実際のところはわからない。
だが、彼女が口づけた瞬間、助六の体の中に何かが流れ込んできた感覚はあった。
助六は少し戸惑った表情を浮かべて結を見た。
結は先ほどと同じ微笑を浮かべたままだ。

「私の願いは山と共にあること。私は山に溶け込み、土となる。そうして皆の仲間になる。だけど、お前にだけは、私があったことを覚えていてほしいの。だから、その証をお前に植えつけた。これが私の最後のわがまま。……お前は、私を覚えていてくれる？」
最後の言葉で、彼女の笑みはまた悲しげに歪んだ。
「当たり前だ！」
助六は、悲しい気持ちを打ち消したくて、大声で答える。
自然と目頭が熱くなり、涙がこぼれた。
だが、その目は結を見ていた。
一時も結から目を離したくなかった。
結はその顔から悲しさを消して、喜びの色を濃くする。
そして、助六の涙を指で掬い取って、自分の頬にこすりつけた。

「温かい……。もう少し早くお前のような人に会えていれば、私は何か変わっただろうか……」
結は目を細めて助六を見た。彼女の体からは、光る粒子が溢れ出していた。
「……今更、か……。私はいつまでもここにいる。ずっと……お前と一緒だよ……」
そう言った途端、結の形が崩れ去り、眩い光が洞穴中に広がった。
助六は耐え切れず、顔の前に手をかざし、目をつぶった。
その時、聞き覚えのある歌が聞こえたような気がした。
遠い母を思わせるような、優しげな音色だった。

次に目を開いた瞬間には、結はいなかった。　ただ洞穴の部屋があるだけだった。
その部屋も、先ほどよりは寒くない。
壁に凍りも張り付いていなかった。
助六はただ呆然とその場に座っていた。

と、身じろぐ気配がした。
何かと部屋中に視線を巡らすと、転がっていた人達が起きたのだ。
結は人体の熱を奪って、力にしていた。
先ほどの光は奪った熱だったのか。結は自分の中にあった奪った熱を戻したのか。
そこまで考えて、助六は意識が途切れた。

そうして、次に目覚めた時には、村長の家にいた。
見覚えのある光景で、もしかしたらさっきのことは夢だったので

はないか、という思いも沸いてきた。
目を移すと、傍らには村長がいた。
だが、今度の村長の顔は、前と違って笑顔だった。
助六はゆっくりと起き上がろうとする。
だが、村長が手を出して止めた。
「まだ安静にしていなさい。凍傷がひどいから、温めているところだ。お前は運がよかった。それ以上ひどかったら手の一本や二本切らねばならなかったからな」
助六は寝たままの姿勢で、村長を見た。
「村の者は、どうした」
少しのどの調子も悪いようだ。かすれた声が出る。
「様子を見に行った者は無事に戻ってきた。その前に行方不明になった者も、ケロっとして戻ってきたヤツもいれば、まだ意識が朦朧としてるヤツもいるが、みんな一応生きて戻ってきた。お前のおかげだよ。ありがとう」
「別に、そんなこともないだろうさ」
助六は自嘲気味にそう言った。
正直言って、自分が何をできたのかよくわからない。
自分が結にどういう影響を与えられたのかもわからない。
でも、とりあえずは、最後に結の笑顔が見れたから、よしとしておこうと思うだけだった。

「その体じゃ、しばらくは動けないだろう。動けるようになるまでとりあえずうちで休むといい。帰る時に金も渡そう」
村長はそう言って、奥へと向かった。
蒸気が吹き出る音がしたから、お湯でも沸いたのだろう。
村長が離れると、助六は自然とため息を吐いていた。
本当は金なんかもらわないで、すぐに出て行きたかった。
でも、この体ではすぐに出て行くこともできないし、寺に世話になっている身の上としては、金ももらわないと困る。

気持ちに整理をつける良い機会かもしれない。いや、それならなおのこと寺に帰る方がいいが。
ただひたすらに経を読み、寺の雑用をする日々は、退屈であるが、一番心の平安を保てる。
昔は周りのもの全てが嫌だったが、今では全てが美しく見えた。
その助六の変化を受けてか、周りの者も助六と打ち解けるようになった。
それも全ては今の師匠に出会えたから。
今でも、彼女が消える最後に聞こえた歌が耳に残る。
余韻が、体中に響いた。
まだ、体の中には彼女の温もりが残る。冷たい熱が。
寺に帰ったら、師匠にどう話そうか。
あの人は何と言ってくれるだろうか。

きっと、一生忘れることのできないこの出来事を。

雪切恋歌　ー後日談ー　【1】

その日は、爽やかに晴れた、暖かい日だった。
こういう日は、もうすぐ春が来るのではないかと、春への恋しさが強まる。
そんな日、助六は師匠の目の元、写経を行っていた。

助六の師匠である無名むみょうは、漢詩の本に目を通していた。
助六が進める筆の音だけのする空間の中、年月の重みのあるしわがれた声が突然響いた。

「助六、お前、恋をしたな」

びしゃ。
助六は動揺の余り、力加減を間違え、筆を紙に強く押し付けてしまった。
見事に文字が潰され、黒い大きな染みが広がってしまった。

「お師匠様！」

助六は無名に向かって怒鳴った。その顔は真っ赤になっていた。
「ほぅ、どうやら図星のようだな」
睨む助六に全く動じないように、無名は僧に似つかわしくない意地の悪い笑みを浮かべていた。
助六はますます顔を赤くする。
「そ、そんなことは……」
小さく口元で転がすように助六は言い訳をしているようだが、その声は無名には届いていない。

「お前が雪女の村から帰ってきて以来、様子が変だったからな。どうしたのかと思っていたのだが。僧侶は煩悩を捨て去るものだが、お前はまだ若い。そういうことの一つや二つあったとて誰も責めはしないさ」
我が子の成長を見るような笑顔で、無名はそう言った。
助六は、僧にあるまじき発言をする自分の師匠を半ば呆れた目で見ていた。
「何だその目は。写経を増やしてほしいのか」
無名は変わらない笑顔だが、その声には少し棘がある。
「別に俺は暇ですから、いくらやっても平気です」
助六は涼しい顔をして筆を取り直した。
新しい紙を取って、また初めから書き写し始める。
「そうだったな。お前はそういう作業が好きだったな。いじめがいのない奴だ」
無名は心底つまらなさそうな顔をしていた。
「お師匠様は、つかみ所のない人だと思います」
助六の本心だった。
実際、的を射る発言をするかと思えば、子供っぽい一面も見せたりもする。
助六の言葉に、無名は大きく口を開けて、楽しそうに笑った。
助六は気づかれないようにため息を吐いて、写経を続けていた。
本来写経は精神を落ち着かせるためにするものなのに、これでは全く写経の意味がない。
ただ経文の複製を作っているだけにしか過ぎない。
だが、助六は仏教徒ではなかった。少なくとも本人はそのつもりではなかった。
だから写経の意義など、本当のところどうでも良かった。
住んでいる場所が寺ということと、自分の師匠という二つの理由で、どうしても仏教と関わりを持たなければならなかっただけだ。

「そういえば助六、お前髪は剃らないのか？」
また無名が声をかけてくる。
「お師匠様、論点をまとめてください。先ほどの話題はどこにいったのですか」
「なんだ、そんなにお前は恋の話がしたかったのか」

ずび。
筆がずれた。思いっきりずれた。紙を破いてしまった。
助六はまた新しい紙を机の上にのせた。
だんだん助六は情けない気分になっていた。
「お前もそういうことに興味のある年頃だよな。いやいや、結構なことだ。お前の好みというものがイマイチわからんでな。何も言わなかったのだ。だが、私も伊達に年を取っている訳ではない。何かあれば助言をするぞ」
その助六の様子に、無名は喜々としていた。
助六は、筆を置き、今度はきちんと無名と向かい合った。

雪切恋歌　ー後日談ー　【2】

「お師匠様は、俺に何が言いたいんですか」
無名は笑みをうかべたままだったが、その顔にやや鋭さと重みが増した。
「ようやく話をする気になったか。では単刀直入に聞こう。……あの村で何があった」
互いに目線を合わせたまま、しばらくの沈黙。
この人の目は何も逃さない。何も逃れられない。
助六はよくわかっていた。

「……何から話せばいいのか……」
本音だった。色々なことがありすぎて、何から話せばいいのかわからなかった。
思わず視線が宙をさまよった。
「お前の心に残ることを話せばいい。全てを語る必要はない」
無名は壁に背中を預けたまま、助六を見る。その目は優しい色になった。

「……山と共に生きる、優しい女に会いました……」

助六はそうして、ぽつぽつと語りだし、村で起こっただいたいの内容を伝えていた。
無名はその話を静かに、目を閉じて聞いていた。
彼が何か考える時の癖だった。
助六が話し終えると同時に、彼もゆっくりと目を開ける。
少しの沈黙の後、無名は口を静かに開いた。

「……お前が帰ってきてから何かおかしいと思ってはいたが、そう

いうことがあったのか」
「お師匠様は恋だ恋だとおっしゃいますが、正直なところ、俺はこの気持ちが恋なのかよくわかりません。女性と接することも苦手ですし」
「そうか。お前自身がわからないことを、他人である私がわかるわけがないから、私だってその気持ちを何であるかなど決められない。だが、少なくともお前はその結という女の存在を恋しく感じていると私は思う」
「……そう、ですね……」
「人は時にそれを『恋』という」
「……そういうもの、ですか……」
「まぁ、好きに考えるがいい。名前がついたからと言って、気持ちが変わる訳じゃない」
「はい……ありがとうございます」
助六は腰を折り、畳に手をついて深く礼をした。
次に顔を上げた時、目の前の無名の顔は、また茶目っ気のある顔になっていた。
助六は嫌な予感がした。

「それにしても残念だ。助六は私が幼少の頃から目をつけておったのに、やはり女に目がいったか」
助六はその言葉を聞いて、凍りつくように固まった。実際、血の気が引く感覚に襲われた。
無名は、考え方は破天荒ではあるが、一つだけ他の僧侶達と気の合うことがあった。
男色。女人禁制の場ではしばしばあることだった。
さらに寺では小姓の少年が夜伽に呼ばれることもしばしばあった。
幼少の頃から寺にいる助六も、そういうお呼びがかかりそうになったが、無名がかくまってくれたから、相手をせずに済んでいた。
だが、彼は幼少の助六をかくまった初日に、自分の性癖を告白し、

寺の裏で行われていることをこと細かく説明した。
幼い助六には衝撃的で、難しい内容も多かったが、言い知れぬ危機感を本能は感じていて、真剣に聞いた。
無名はいつも自分を助けてくれていたから、ついついその事実を忘れてしまっていた。
しかし、今の発言は今まで聞いたことのない衝撃の真実だった。
でも、かくまってくれたことだって、理由もなしにするはずもない。
そう考えると、つじつまが合うと言えば、合う。

「ど、どういうことですか……？」
助六は思わず呟くようにそう言っていた。
助六は口から出てしまった言葉を後悔した。答えは聞きたくなかった。
「お前は幼少の頃からかわいかったからな。これは育てばいい男になると思っていたのだよ。うん、私好みの奴になったが、剃髪をしなかった時に、これは駄目かもしれんと思ったな」
「……はぁ……」
無名は相変わらず笑顔だったが、助六の気分は落ち込む一方だった。

「まぁ、冗談はその辺にしておいて……」
「え！？」
助六は無名の言葉に大きな反応を示した。
無名はその反応に少し驚いたように目を見開いた。
「何だ。お前にはまだその気があるのか。それなら私はいつだって……」
「違いますって！！」
助六は力いっぱい否定した。
この老僧、年齢までわからなくなってきた。

どこからそんな精力が出るのか――ではなくて。
助六は一度落ち着こうと、深く息を吸った。
無名は先ほどと同じ笑顔でいた。

「先刻のは冗談だ。嘘ではないが、あまり真剣に取るな。真面目ばかりでは疲れてしまうからな」
助六は頭が痛むような心境だった。思わず額に手をあててしまった。
師匠の戯れに疲れたのと、やはり先ほどの話は嘘ではなかったのか、という複雑な思いもあった。
「でも、私の育て方がよかったのか、お前には良い傾向が出てるようでよかった。仏教の良さをわかってもらえなかったのは残念だが」
「お師匠様の教えで、仏教の良さを知れというのが無理です」
無名は小さく、息をつくように笑った。
「やはり、髪は剃らないのか」
「……はい」
「決めたのは、その女のためか」
「……俺には、捨てきれないものが多すぎます。真理を悟るために俗世を捨てるべきなのか、どうしてもその必要性がわからないのです。……きっかけは、彼女だったのかもしれません」
「辛いことになるぞ。お前には希少な能力があるから、ここでの生活はしていけると思うが……」
「……俺は……ここを出ていこうと思います」

雪切恋歌　ー後日談ー　【3】

助六は自分の師匠の目をまっすぐに見た。
その瞳は、明るく冴えていた。
無名は目を細め、眩しそうにその視線を受けた。
そして、無名はさりげなく視線を下に向け、目を閉じる。
どこか、その顔は嬉しそうだった。

「そうか……。すっかり頼もしくなったな、助六。お前なら旅に出てもやっていけるだろう。……これで私は安心して死ねるよ」
「何をおっしゃいますか。まだ俺はお師匠様に教えていただきたいことがたくさんございます。お師匠様がここにいる間は、まだ寺にいるつもりです」
助六の顔が心細そうに歪んだ。
「あぁ、そんな顔をしてそういうことを言うな。抑えがきかなくなるから」
無名言葉に、途端に助六は大きく体を震わせて後ろに下がった。
無名はのどの奥から出すような声で笑っていた。
「またお戯れを……」
助六は苦笑いを浮かべていた。
しかし、次には無名の厳しい声が入る。
「……だが、私の側にい続けることがお前のためになるとは限らない。これからのこと、よく考えることだ」
無名は目は閉じたまま、そこには笑顔はなかった。
「……はい」
助六は、顔をひきしめてうなずいた。

人の寿命は永遠ではない。無名の側にいつまでもいられない。
半端者を抱え込んでいる無名の立場もあまり良くないことも知っていた。
無名はいつも一人で自由に生きているように見えるが、世間のしがらみから完全に脱することはできない。
無名に、これ以上迷惑はかけられない。
自分が、しっかりしていかなければ、と助六は思っていた。
寺を出ようと考えたのは、そのためでもある。
この能力と、寺で学んだことを使えば、どのような形にしろ、生きてはいけるだろう。
元から、この寺の者に情を持ってはいない。
それに、寺の中だけでなく、外の世界のことも見てみたかった。
せっかく捨てずに選んだ俗世だ。色々なものを見てみたい。
寺を出る時は早い方がいいかもしれない。
師匠の言葉もあり、助六はその思いを強めた。
ふと、胸の冷たいぬくもりがうずいた。
助六が思わず胸に手をやると同時に、無名の声がした。

「それじゃあ、写経はもう良いから、この詩を読んでみろ」
助六の思考を遮るように、無名は自分の持っていた本を助六の前に置いた。
助六は本を手に取るが、不安げな顔で無名を見た。
「……読むことは苦手です」
「苦手なら練習をすればいい。読まなければうまくならん。声を出すことも大事だぞ」
「今まであまりこういうことはしていなかったかと……」
「私がお前の声を聞きたいんだ。老い先短いし、お前もいつここを出て行くかわからんというのなら、私の好きにさせてもらうよ。嫌

ならしなくてもいいんだぞ」
無名は試すような笑顔で助六を見ていた。
心底状況をおもしろがっている顔だと、助六は感じていた。
助六が無名の頼みを断ることなどしないとわかっているのだろう。
助六は渋々詩を読み始めた。慣れぬせいか、たどたどしく。
その声は雪に吸われて、部屋にこもる。誰にも聞かれなかった。
外では、暖かく日が大地を照らしていた。
声を吸い込む雪の光がチラチラと揺れる。

春はまだ、遠い。

RAN　＊＊＊2006／5／10＊＊＊

影炎巡恋【1】

「お師匠様、行って参ります」

助六は、無名と向かい合わせになり、そう言った。

珍しくその体は僧服に包まれている。

笠もかぶり、まさにこれからでかけようとする、かなりの旅になる格好であった。

「ついにこの日が来たか。すぐだとは思っておったが、やはり寂しいものがあるよ」

「申し訳ありません」

無名の感慨深げに目を細めて言うさまに、助六は気後れして、思わず頭を下げてしまった。

無名はそれを見て、大声で笑った。

「何を気にしているんだ。お前が決めたことだろう。今更何を謝ることがある。むしろこの寺から出て行こうとする立派になったお前を見て、私は嬉しいよ」

無名の笑顔に、自然と助六も笑みがこぼれた。

「お師匠様のおかげです」

「まぁ、お前は私がいないと何もできないからね。寂しくなったら、いつでも帰っておいで。温かく迎えてあげよう」

無名は何やら意味ありげな笑みをうかべていた。

助六は、何となくその意味を察し、嫌な汗を背中に感じながら、苦笑いを浮かべた。

「いえ、一度出ていった手前、戻ってはこれません」

無名は残念そうにため息を吐くが、その顔は笑っていた。

「お前は真面目だからな。まぁ、何かあれば文でもよこせ。助けにはなるぞ」

「ありがとうございます。……それでは」
助六は深く礼をすると、笠をかぶり直して、無名に背を向けて歩き出した。
まだ雪は残っていたが、徐々に地面が顔を出し、木も芽を吹き出す頃となっていた。

しかし、助六はその間のことを覚えていなかった。
何がどうしてこういう状態になったのだろう。

助六は気づくと闇の中にいた。
だが、それは自分が目を閉じているせいだと気づき、ゆっくりと目を開ける。
徐々に目を開けると、ぼんやりと視界に光が入ってきた。
光が痛くはない。ということは室内だろうか。
もっとよく見ようと、目をこらす。
すると、屋根裏が見えた。やはりどこか民家の中らしい。
しかも、自分は仰向けに寝ている状態だった。
かすかに上に重みを感じ、下がやわらかく温かいから、布団の中に入っているのだろう。
周りの状況を確認しようと、とりあえず首を巡らそうとした。その時だった。
「お気づきになられましたか」
助六が動いた気配がわかったのか、若い女性の声が、助六の足の

方からした。
助六が確認しようと首を動かす前に、女性は助六の目の前にやってくる。
音をあまり立てないが、その動作は素早かった。
しかし助六は、その女性の姿を見ると、驚いて目を大きく見開き、女性を見た。

その女性は、結に、そっくりだったのだ。

「結！？」

影炎巡恋【2】

助六は思わず、そう叫び、起き上がろうとした。
だが、起き上がると同時に、背中に鈍い痛みがはしり、少し前に手をついた。

「いけません、お坊様。きっと体を痛めておられますゆえ、急にお動きになられては」

女性は、助六の背中を優しくさすり、そう言った。
よく聞くと、声もどことなく結の響きと似ている。
鈴のように、どこか凛としたような。
でも、言葉の調子が結と違って柔らかでもあった。
なにより、よく見ると、その女性の血色は良さそうだし、何より今自分は女性に触れられている。
結はその触れたものを全て凍らす雪女だった。
だいたい、雪女がこんな温かい室内にいられるわけがない。
少しずつ落ち着きを取り戻し、助六は状況を探ることにした。

「すみません。……私……私はどうして、ここに？　ここはどこでしょうか？」
尋ねられると、女性は助六の背中から手を離し、助六の隣に正座した。
「今日の朝方、この家の裏の川に水を汲みに行こうとしましたら、お坊様が倒れられているのを見つけまして、急いでこの家に運んできたのです。ちなみに、ここは私と父の家です。父は村々を渡って物を売る行商をしております。私は、この村で、いつも父の帰りを待っております。ここはどこか、というと、お坊様がどちらからいらっしゃった方かわかりませんので、何とも説明しにくいのでござ

いますが……。なにせ学がないゆえ、地図を読むこともできませんゆえ」
「いえ、ありがとうございます。学がないとおっしゃるわりには、話し方は村にいらっしゃる方とは思えませんが」
女性の物腰の柔らかさに、自然と助六も打ち解け、思わず笑みを浮かべた。
「お褒めくださり、ありがとうございます。お世辞でも嬉しいです。私の名前は妙、といいます。見たところ、旅のお方のようですね。そのお体ではしばらく動けませんでしょうから、しばらくこの家にいるといいですよ」
「……申し訳ありませんが、お言葉に甘えさせていただきます。旅路での怪我は油断禁物、と師匠にも言われましたので。私の名前は、助六、といいます。すみませんが、しばらくご厄介になります」
「私の父もそう言っておりました。そういえば、お坊様、お体はお拭きになりますか？」
妙が立ち上がり、用意しておいたのであろう桶と手ぬぐいを持ってきた。
「あぁ、湯をもらえるとありがたいですが……あの……その『お坊様』はおやめになってもらえますか？　私はまだ修行の身であるので」
正直言うと、修行をしているつもりもなかったが、この格好で修行をしていないと言うと、色々説明が面倒なので、助六はあえて言わなかった。
何だか、親切にしてくれている妙を騙すようで申し訳なさが増したが、これも世を生きる術である。
「そうなのですか？　でも、私には修行をしていようが何だろうが、お坊様はお坊様です。尊いお方であることには変わりありません。目指そうとする人の心の中にも、尊いものがあると信じております。でも、どうしてもお嫌でしたら、お名前でお呼びさせていただきますが……助六様、とお呼びすればよろしいですか？」

妙は手ぬぐいを桶につけ、絞りながら言う。
だが、助六は「助六様」という呼び方に、「お坊様」以上の違和感を覚えた。
「すみません。それでしたら、『お坊様』のままで結構です……」
世話になっているのに、あまり細かいことを言うのはやはり失礼だろうと助六は考え、ここは「お坊様」で過ごすことにした。
だが、ふとあることに気づいた。
妙が傍らに膝立ちになって、何かを待っている。

「……妙さん、あの、自分の体は自分でふきます、よ……」
どうも言葉調子が弱腰になってしまうのは、世話になっているせいだ、と助六は思いたかった。
「いえ、お坊様。元気な時ならば、少しぐらい無理な姿勢をしても大丈夫ですが、どうやら背中を痛められているようですから、あまり無理をすることは良くないと思われます。なので、失礼ながら私が体を拭かせていただきます」
妙は頑として譲らなさそうだ。しっかり手ぬぐいを握っている。
だが、助六もここで譲るわけにはいかない。
「いえ、本当に自分で拭きますから……」
「いえ、いけません、お坊様」
「いえ、だから……」
「いえ……」

影炎巡恋【3】

こうして、いえいえ問答がしばらく続けられた後、助六は折れてしまった。
そうして今は、上半身だけ着物を脱ぎ、妙に背中を拭いてもらっている。
なんだか、妙に気恥ずかしい気分になっていた。
よく考えると、女性と話したこともなければ、触れられたことなどないのだから、当然なのかもしれない。
助六は不思議な感じに、戸惑っていた。

「とりあえず、上はこのぐらいでよろしいかと。下は……」
「自分でやりますから」
妙の言葉に、さすがに助六はここで強く言い切った。
「本当は私が世話をできればよろしいのでしょうが……」
「結構ですから」
妙に全ての言葉を言わせる前に、助六は強く言った。
少々きつい言い方だな、自身で思いつつも、申し訳なさと恥ずかしさに助六自身が耐えられなくなっていた。

「それでは、風呂場にご案内いたしますので」
それなら、最初から風呂場に案内してもらえばよかった、と助六は少し後悔をしつつも、妙に従って、風呂場に向かった。

「あがりました。湯をお恵みいただき、ありがとうございます」
「ご満足いただけたようでよかったです」

とりあえず、助六は妙にそう声をかけると、所在なさげに少し歩いた後、囲炉裏端に腰をおろした。
よく見ると、囲炉裏には鍋がかけられていた。
野菜が多く入っていて、この地域は野菜が多く取れることをうかがわせる。
中に、いもや肉類も見えた。
この食材を見ると、ここは山に囲まれた場所か、山の近くのようだ。

「今ご飯ができますので」
妙も台所での用事が終わったのか、囲炉裏端に来て、助六と向かい合わせに腰をおろした。
「ありがとうございます」
助六は手を合わせ、礼をした。
仏の道を目指しているわけではない助六だが、人々や自然の恵みに感謝する心ぐらいは持っている。
「いえ。父はこのようにいつも出かけてばかりなので、私はいつも一人でここにいます。なので、誰かがいると、とても安心できます」
妙は囲炉裏の火をぼんやりと見つめながら、淡い微笑みを浮かべていた。
「そういえば、女性一人でこのような所におられて、物騒ではございませんか」
「よく言われますが、不思議と盗賊などにも襲われたことはございません。すぐそこに町があるからかもしれませんが」
「そういうものなのでしょうか……」
色々出回るようになったと言っても、やはりあまり外の世界の事情について疎い助六は、それ以上は何も言えなかった。
「そういえば、お坊様はこれからどちらに？」
妙が思い出したように顔をあげ、助六を見た。
その視線に、助六の胸の辺りが冷たくうずいた。

だが、助六はそれよりも、痛いところをつかれたな、と思っていた。
「実は、寺を出てから、ここまでの間のことがすっかり抜けていて、お恥ずかしながら、自分が何のためにここにいるのかもわからない状態なのです。ただ、元々目的のある旅ではございませんでしたので、また道沿いに歩いていこうかと思っておりました」
すると、妙は目を見開いて、背筋をのばして助六を見た。

「それはいけません。川で倒れていたのですから、もしかしたら大事なことを忘れていらっしゃるかもしれません。もし身に危険が迫っているのであれば、旅の中で何も知らないままに襲われては大変でございます。体が治るまではここにいらっしゃるのですから、少しでも記憶を取り戻してからご出立なされた方がよろしいと思われますよ」
妙は神妙な面持ちで、そう言った。
まるで、自分のことのようであった。
だが、助六もそれを聞いて、なるほど、と納得した。

「それも、そうですね……」
助六は顎に手を当てた。考える時の彼の癖だった。
「よければ、私にお話くださいませんか？　人に話せば、より頭が整えられて、思い出しやすいかもしれません」
「……付き合って、いただけますか？」
妙の言葉に従ってばかりだな、と助六は思っていたが、彼女の言うことはいつも妥当性があるため、やはり素直に聞くことにした。
「もちろんです」
妙は笑顔で答えた。

「あぁ、もう鍋も煮えたようです。夕飯をお召し上がりになりながらでも」

気づいたように鍋に目を移した妙は、横から器を取り出し、手際よくつぎ、助六に渡した。
「ありがとうございます」
助六は器と箸を受け取った。
そして、頭を下げ、器を上にかかげる。
「いただきます」
「はい、お召し上がりくださいませ」
妙も自分の分の器に鍋のものを取ると、同じように頭を下げ、器をかかげた。
そして、頭を元に位置に戻すと、また助六と視線があった。

また、助六の胸に、冷たいうずきがはしった。
今度は、助六はきちんと確認していた。

ＲＡＮ　＊＊＊２００６／１２／１５＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3339r/

雪切恋歌

2011年8月15日03時31分発行